

源氏物語の「女にて見る」をどう訳すか

— 翻訳のなかのジェンダーバイアス —

スドウ ケイ
須藤 圭

はじめに

日本文学史をあざやかに彩る文学の多くが、翻訳というかたちをとって、異なるコトバに移しかえられ、言語を越境しつづけている^①。日本文学や日本文化は、翻訳という行為を経ることによって、世界に向けて発信される。その翻訳されたコトバたちに、わたしたちは、どのように向きあっていけばよいか。

たとえば、源氏物語は、英語やフランス語、ドイツ語、中国語、韓国語などに訳されており^②、それぞれの研究も盛んに行われている。それらのなかには、原文と翻訳を見比べて、誤訳を指摘するものや、翻訳が試みた工夫を明らかにし、どの程度、原文の特色を表現できているかを評価するものなどがある。また、翻訳だからこそ、これまでに知られることのなかった原文の本質が表出している、と述べるものもある。

多くの貴重な提言が翻訳によってもたらされる、といってよいのだが、しかし、翻訳のもつ価値は、これらにとどまるのだろうか。翻訳は、対象となる文学との関係性をとびこえ、その翻訳がなされた時代に、意識されることなく、自明のものとして存在してしまっている制度、すなわち、社会や文化の枠組みをあばきたててくれるのではないか^③。

翻訳には、無意識のうちに生じてしまうバイアス（偏り）が、必ず、存在する。もとの作者とは異なる訳者がかかわり、もとの言語から異なる言語へと移しかえていく行為には、常に、訳者の解釈が介在するからだ。解釈は、訳者が

生きる時代という大枠はもとより、訳者個人の思想にもかかわってなされるものに他ならない^④。だから、そこに、ひとつひとつの翻訳によって異なるバイアスが生まれていく。数多くの言語へ翻訳された源氏物語に、多言語的複数性を汲みとるならば、その多言語的複数性を均一なものとして受けいれてしまうのではなく、多言語的複数性のなかにあって、個々に異なるバイアスのかかった一回性を見つめ、バイアスの淵源にある社会や文化の枠組みを問いなおしていくことが求められているはずである^⑤。

本稿では、源氏物語にあらわれる「女にて見る」という表現をとりあげる。源氏物語の「女にて見る」が、はたして、どのように訳されているかを見わたしながら、それぞれの翻訳にひそむバイアスの存在を明らかにする。そうして、翻訳がもたらすものを考える一助にしたいと思う。

一 「女にて見る」の研究史

源氏物語のいくつかの巻には、「女にて見る」という表現がある。「女にて見る」は、(1)「男である相手を女にして見る」、あるいは、(2)「自分が女になって男である相手を見る」の意味とされる。この表現がはじめてあらわれるところを、現在、比較的良好に利用されている『新編日本古典文学全集』からとりあげてみる。傍線は、稿者による（以下同じ）。

白き御衣どものなよやかなるに、直衣ばかりをしどけなく着なしたまひて、紐などもうち捨てて添ひ臥したまへる御灯影いとめでたく、女にて見たてまつらまほし。この御ためには上が上を選び出でて、なほあくまじく見えたまふ。

白い柔らかなお召物の上に、直衣だけをわざとしどけなげにお召しになり、紐なども結ばぬまま物に寄りかかっていらっしゃる、その灯影のお姿はまことに美しく、女にして拝見してたいくらしいである。このお方のためには、上の上の女を選び出しても、まだ満足ということ

はありそうもなくお見受けされる。^⑥

帚木巻、光源氏と頭中将、後に、左馬頭、藤式部丞が加わって繰りひろげられる「雨夜の品定め」の一節である。話に耳を傾けつつ、直衣を無造作に身につけ、紐も結ばないまま、物に寄りかかっている光源氏の、その灯火に照らしだされたすがたが、「女にて見たてまつらまほし。」と評されている。

『新編日本古典文学全集』によれば、「女にて見たてまつらまほし。」は、「女にして拝見してたいくらいである。」と訳される。これは、谷崎潤一郎新々訳が「(稿者注—光源氏を)女の身におさせ申して拝みたいようです。」^⑦と訳していることと同じだ。「女にて見る」を、(1)「男である相手を女にして見る」と解釈していることが分かる。

そのいっぽうで、瀬戸内寂聴訳は、「(稿者注—自分じしんが)女の身になって(稿者注—光源氏を)拝見したらいっそううっとりするだろうと思われます。」^⑧と訳している。「女にて見る」を、(2)「自分が女になって男である相手を見る」と解釈していることが分かる。

こうした解釈の揺れをかかえもつ「女にて見る」は、室町時代の古注釈以来、継続して議論がなされてきたところでもあり、充実した研究の蓄積がある。吉海直人氏編『源氏物語研究ハンドブック 1』^⑨によると、「女にて見る」関係研究文献として、16編の論文を数えることができる。

さて、この研究史にしたがえば、両説のうち、(1)説が支配的になっているようだ。たとえば、1976年に刊行された岩井良雄『源氏物語語法考』^⑩は、「女にて見る」とは、源氏物語特有の表現で、美しい相手の男性を女性として見るという義。つまり「女にシて」で、男に、女の資格を与えるのである。」といい、(1)説だけに言及する。1982年の吉海直人氏「『源氏物語』の男性美——「女にて見る」をめぐる——」^⑪も、「もはやA説(稿者注—(1)説)は定説となったと見てもいいであろう。」と述べ、2007年の山崎和子氏「源氏物語「女にて見奉らまほし」再考」^⑫も、「今日ではほぼ、「女にて」は見る相手を「女に

して」「女として」と解釈することで定着していると思われる」という。2011年に出版された『源氏物語大辞典』¹³も、「をんなにてみる 女にて見る マ上一（男が）相手を女として見る。」として、やはり、（1）説だけを掲げている¹⁴。

ところが、（1）「男である相手を女にして見る」が定説である、といいながらも、たとえば、1996年の瀬戸内寂聴訳が、（2）「自分が女になって男である相手を見る」で解釈していたように、「女にて見る」という表現は、単純な正誤の問題で解決できるものではないらしい。また、（1）「男である相手を女にして見る」が定説になっているといわれるなか、1993年に刊行された『新日本古典文学大系』にある、次の発言は示唆的である。

源氏の君を女に仕立てて拝見したい。あるいは愛人にしてお世話したい。
頭中将からの判断。こちらが女の身になって、と取る読みもある。¹⁵

「こちらが女の身になって、と取る読みもある。」という発言が示すように、ここには、「女にて見る」の解釈が、まさしく、この場面をどのように読もうとするのか、といった「読み」の問題であることが宣言されている。

円地文子は、1972年から1973年にかけて源氏物語の現代語訳を刊行したことで知られているけれども、同時に、「女にて見る」にかかわる文章も書いている¹⁶。円地は、そのなかで、いくつかの「女にて見る」があらわれる場面を取りあげつつ、帯木巻の「女にて見奉らまほし」について、（1）説で読むことに理解を示しつつも、「私の感性はどうもこの解釈に従いたくないのである。」という。つまり、円地は、（2）説で考えようとするわけだが、ここで見過ごせないのは、円地が、「私は結局、自分の読み方を主にして文章を進めて行くことにしている。それが私自身の『源氏』から伝えられた言葉だと信じているので。」といい、「全訳となれば、この言い方もあり、あの言い方もありでは文章にならないので、訳者自身の判断でその一つが選まれて、文脈が形づくられている。つまりそれを訳者の解釈と見てよいわけであろう。」と述べていることだ。じっさい

の円地による現代語訳も、先の見解にしたがって、「(稿者注—自分じしんが)女の身になって(稿者注—光源氏を)お見上げ申したらいつそうそのあでやかさに恍惚とすることであろう。」^⑮と、(2)説の解釈で読んでいることが確認できる。

また、円地は、源氏物語の全訳を終えたあとに書かれた文章のなかで、次のようにもいう。

たとえ、原文を、中世の仮名文字の写本で読んだにしても、私どもの生きている世界が一九七〇年代の日本であってみれば、現実を潜りぬけて来る光線も音響もその他すべてのメカニズムは王朝の読者の読んだ『源氏物語』と異なるものであるのは当然過ぎる事実である。古典とは、そういう各々の時代の烈しい変貌に耐えて、逆にその変貌の中から新しい血を吸い上げ、若がえってゆく不死鳥でなければならない。

若しこの現代語訳にいささかでも意味があるとすれば、それは一九七〇年代を時点として訳された『源氏物語』だという一事であろう。^⑯

これらの円地の述懐が教えてくれることは、円地の見解が、現在、定説になっているといわれる解釈と異なっていることではない。円地訳は、円地という訳者が生きた時代に、円地という訳者によって書かれた、円地の『源氏物語』だ、ということだ^⑰。

「読み」の問題である、ということは、すなわち、訳者が、源氏物語のどこに注目し、何を受けとり、そうして、「女にて見る」をどのように解釈したか、ということでもある。帯木巻の「女にて見る」をめぐって、『新編日本古典文学全集』、谷崎潤一郎新々訳、瀬戸内寂聴訳、『新日本古典文学大系』、円地文子訳と見てきたが、そのいずれにおいても、帯木巻の「女にて見る」の現代語訳には、その「女にて見る」の解釈が介在している。解釈の積み重なりの中で、現代語訳が形づくられていくのであり、そして、それぞれの現代語訳のひ

とつひとつが、異なる解釈と異なる現代語訳をもっているのだ。

このことは、とうぜん、現代の日本語訳の問題にとどまらない。英語やフランス語、中国語といった外国語への翻訳にも、同様の問題が喚起される。現代日本語訳もまた、広い視野で眺めてみれば、古語から現代日本語への翻訳ということもできるはずだ。翻訳には、常に解釈がともない、その翻訳の世界が形づくられている、ということができらるだろうし、その翻訳のひとつひとつが、異なる解釈と異なる世界をもっている、ということもできらるだろう。そこで、次に、「女にて見る」にかかわるいくつかの外国語訳を見ていくことにしたい。解釈のなかで形づくられた外国語訳には、旧来、議論がなされてきた、相手を女にするか、自分が女になるか、の二項対立にとどまらないすがたがあり、そこに、外国語訳がなされた社会や文化の枠組みが透けてみえるように思うのである。

二 翻訳とジェンダーバイアス

「女にて見る」は、ウェイリー英訳では、次のようにあらわれる。

【ウェイリー英訳】

He was dressed in a suit of soft white silk, with a rough cloak carelessly slung over his shoulders, with belt and fastenings united. In the light of the lamp against which he was leaning he looked so lovely that one might have wished he were a girl; and they thought that even Uma no Kami's "perfect woman," whom he had placed in a category of her own, would not be worthy of such a prince as Genji. (THE BROOM-TREE p.21)

光源氏は、やわらかい白い絹の服を着て、粗い上着を無造作に肩にひっかけ、帯と留め具も結んでいなかった。彼がもたれかかっている燭台の明かりのなかで、彼は、とても愛らしく見え、人は、彼が女だったらよかったのに、と願ったかもしれない。そして、彼らは、馬の頭

が独自のカテゴリーに入るとした「完璧な女」でさえも、光源氏のよ
うな皇子にはふさわしくない、と考えた。

「one might have wished he were a girl」（人は、彼が女だったらよかったの
に、と願ったかもしれない）とあることから、（１）「男である相手を女にして
見る」、（２）「自分が女になって男である相手を見る」のうち、（１）説を選択
していることが分かる。

サイデンステッカー英訳、タイラー英訳でも、解釈はもとより、訳しかたじ
たいにも大きな違いはない。いずれも、「wish」そして「a girl」「a woman」が
用いられ、「女であって欲しいと願う」と訳している。

【サイデンステッカー英訳】

He was wearing several soft white singlets with an informal court robe
thrown loosely over them. As he sat in the lamplight leaning against an
armrest, his companions almost wished that he were a woman. Even the
“highest of the high” might seem an inadequate match for him.

(The Broom Tree p.24)

光源氏は、いくつかのやわらかい白い服を着て、その上に、非公式の
宮廷の上着を、緩く投げかけていた。彼が燭台の明かりのなかで肘か
けに寄りかかって座っているのを見て、彼の仲間は、彼が女だったら
よかったのに、とさえ願った。「高貴な身分のなかでも最高のひと」で
すら、彼にふさわしい相手としては、不十分に見えるかもしれない。

【タイラー英訳】

Over soft, layered white gowns he had on only a dress cloak, unlaced at
the neck, and, lying there in the lamplight, against a pillar, he looked so
beautiful that one could have wished him a woman. For him, the highest

of the high seemed hardly good enough. (The Broom Tree p.24)

光源氏は、普段着だけを身につけ、やわらかく、白い上着を重ねて、首もとは緩めていて、そして、燭台の明かりの中で、柱にもたれかかっていたのだが、その彼はとても美しく、人は、彼が女だったらよかったのに、と願うほどだった。彼にとっては、高貴な身分のなかでも最高のひとであっても、十分に満足できる相手ではまったくくないと思われた。

英訳だけではなく、その範囲を広げてみる。

【シフェール仏訳】

Sur une robe blanche d'étoffe souple, il s'était contenté de jeter négligemment une casaque aux cordons dénoués et, nonchalamment accoudé, à la lueur de la lampe, il était si charmant que l'on eût aimé le voir sous les traits d'une femme. Pour celui-là, aucune, l'eût-on choisie au-dessus de la classe la plus élevée, ne semblait devoir être assez parfaite. (L'arbre-balai volume 1 p.89)

柔らかな布地の白い着物を身につけ、光源氏は、紐をほどいたままの上着を無造作にはおっただけで、くつろいで肘をついていたのだが、燭台のほのかな明かりのなかで、彼はとても魅力的だったので、彼を女性の様子にして見たいほどだった。このひとのためには、誰ひとりとして、最も高い階級のさらに上の者から選んだとしても、十分に申し分のないものだろうとは思われなかった。

シフェールによる仏訳は、「l'on eût aimé le voir sous les traits d'une femme.」(彼を女性の様子にして見たいほどだった。)と訳す。シフェール仏訳も、(1)説で解釈していることになる。

ところが、この仏訳を、三つの英訳と子細に見比べてみると、「wish」に対応する「aimé」、「a girl」「a woman」に対応する「femme」があるなかで、シフェール仏訳には、「sous les traits」（様子、見た目にして）が付け足されていることに気づく。女性を装った光源氏のすがたが見たい、と解釈しているのであり、そうだとすれば、ここでの光源氏は、男としての性別とは完全に離されていないことになる。シフェール仏訳は、三つの英訳と比べて、性別を男から女へ転換しようとする理解に抵抗があり、ひるがえって、三つの英訳には、男である光源氏の性別を転換し、女として捉えてしまおう、とする姿勢を読みとることができるようにも思われてくる。

さらに、豊子愷による中訳、林文月による中訳も見ておきたい。

【豊子愷中訳】

此时他身穿一套柔软的白衬衣，外面随意地披上一件常礼服，带子也不系。在灯火影中，这姿态非常映丽，几令人误认为美女。为这美貌公子择配，即使选得上品中之上品的女子，似乎还够不上呢。（帚木 上・24頁）

そのとき光源氏は柔らかな白い下着を着て、その上に礼服を気兼ねなくはおり、紐も結んでいなかった。灯火の中での、そのすがたが非常に美しく、美女だと思わせるほどであった。その美しい顔の若君の結婚相手を選ぶため、たとえ上流の中の上流の女を選んだとしても、釣りあわなかった。

【林文月中訳】

他穿着一袭柔软的白衣，随便地罩着一件直衣，也没有系好带子，将身子斜依在几上。灯光照亮着他的侧脸，那种美丽的样子，看来就如同女性一般。像这样美好的人，就算是挑出一位上上之选的人给他，还觉得不够相称呢。

（帚木 一・24頁）

光源氏は柔らかな白い衣服を着て、直衣をいい加減に覆いかぶせて、

紐も結ばず、何かに体を寄りかけていた。灯火は彼の横顔を明るく照らして、その美しい姿は、まるで女のようにだった。このような美しいひとに、たとえ最上のひとを選んだとしても、まだふさわしくないと考えた。

豊子愷中訳では、「几令人误认为美女。」（美女だと思わせるほどであった。）とあり、林文月中訳でも、「看来就如同女性一般。」（まるで女のようにだった。）と訳されている。両者がまったくの同一であるとはいえないものの、それでも、この二つの中訳からは、シフェール仏訳と同様、光源氏の性別を男から女へ転換しようとする理解を読みとることが難しい。

シフェール仏訳、豊子愷中訳、林文月中訳と見比べたとき、ウェイリー英訳、サイデステッカー英訳、タイラー英訳の三つの英訳には、男である光源氏の性別を女に変えてしまいたい、と殊更に捉えようとするかのような姿勢が浮かびあがってくる。三つの英訳は、男である光源氏の性別を転換させ、女としての光源氏と、それを眺める男を対置させ、帚木巻のこの場面に、男女の構図を汲みとろうとしているのではないか。

三つの英訳のうちのひとつ、ロイヤル・タイラーは、「男性のイメージを覆う女性のバール」^⑩と題された論文のなかで、「女にて見る」にあらわれるような「女性のバール」に対して、理解が相当に難しかったことを表明しつつ、その「女にて見る」を、「性的な色づけ」のなかで読み解こうとする。男女の構図を読みとろうとする三つの英訳の姿勢は、「女にて見る」を「性的な色づけ」のなかで解釈しようとするタイラーの姿勢と、ぴたりと重なりあってくる。

「女にて見る」ではないけれども、タイラーは、次の須磨巻の場面においても、男性である光源氏の、女としての性を読みとろうとしている。

涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき黒き御数珠に映えたまへるは、古里の女恋しき人々の、心みな慰みにけり。

涙がこぼれてくるのをお払いになるお手つきが、黒い数珠に映えてひとしお引き立っていらっしゃる、そのお姿を拝しては、故郷の女が恋しい供人たちも、心がすっかり和むのであった。^{②1}

光源氏は、わずかな従者だけを引きつけて、須磨へ退去した。光源氏も、従者たちも、都に残してきたひとびとへの哀愁は強い。そうした須磨での秋の夕暮れのひととき、ひっそりとたたずむ光源氏のすがたを見て、従者たちが、故郷にのこしてきた女を恋しく思う気持ちをやわらげられているくだりだ。

タイラーは、従者たちの慰めとして、「この慰めは情動的な満足感（どのぐらい性的なそれであるかは自由だが）と美的な満足感、そして危険ではあるが、光源氏の須磨行の供をしたことの正当性を改めて確信したという感情が綯い交ぜになったものである。」と述べ、そのすべてではないものの、「情動的な満足感」を読みとろうとする。

須磨巻のこのくだりにおいて、光源氏は、必ずしも、女性的である必要はない。男と女の性を超えた究極的な美しさをもつ光源氏のすがたが、故郷や故郷に残してきた女のことを忘れさせ、従者たちの慰めになっている、と読むこともできるはずだ。そこに、あえて、「情動的な満足感」を組上に載せ、男女の構図として把握しようとするところに、タイラーの「性的な色づけ」のなかでの解釈がある。それは、同時に、帚木巻の三つの英訳ともつながっていく^{②2}。

帚木巻の「女にて見る」をめぐるいくつかの外国語訳をとりあげながら、タイラーの見解も参照しつつ、三つの英訳に、男女の構図が殊更に反映させられていることを述べてきた。三つの英訳に見いだされた男女の構図の背後にあるものをあばくことは容易ではないけれども、あるいは、日本の平安時代に書かれた源氏物語において、性差は、いとも簡単に乗りこえられていくものだと考えられていながらも、しかし、男と女の性のなかでこそ物語は展開していくはずだ、という理解があったのだろうか。それは、三つの英訳が生まれた時代の社会や文化が導きだした結論でもあった。帚木巻の「女にて見る」の翻訳の

なかに見いだされたジェンダーバイアスは、翻訳がなされた社会や文化の枠組みを知るための、ひとつの手がかりなのだ。

おわりに

わたしたちは、翻訳と向きあうとき、翻訳をひとつの解釈を示したもの、すなわち、源氏物語の新たな側面を照らしだしたもの、いうならば、ひとつの「異本」として受けとめていく視点を獲得している。同時に、翻訳という言葉を超境していく行為には、必ず、バイアスが存在することも知らなければならない。本稿は、翻訳の一回性を見つめながら、そこにひそむバイアスをあぶりだす試みであった。

もっとも、翻訳にひそむバイアスには、外国語訳同士の影響関係や、依拠した底本、参照された注釈書からの影響も見過ごせないはずだし、とうぜん、「女にて見る」だけにとどまるものでは、決してない。たとえば、玉上琢弥『源氏物語評釈』²³が、帚木巻において、光源氏が空蝉に語りかけるさまを、「女」のコトバがないにもかかわらず、物語本文にある「やはらかなり」をキーワードとして「女に、男の言葉であることを忘れさす言い方だ。同性愛。」（第一巻・272頁）といい、橋姫巻での八の宮の容姿に関して、やはり、「女」がないなかで、「なまめく」をキーワードとして「なよびかな女の姿にも通う。」（第十巻・42頁）というのは、「やはらかなり」や「なまめく」であるのは女でなければならない、というバイアスがあったはずだ。

翻訳は、それが解釈をとまなうものであるため、いいかえれば、まさしく「読み」の問題とかかわるため、必然的に、訳者のバイアスがはたらく。そして、そのバイアスは、とうぜん、訳者が属する社会や文化とも密接にかかわっている。翻訳と向きあうこと、それは、こうした考察のはてに、翻訳の属する社会や文化の枠組みを問いなおしていく行為であるに違いない²⁴。

【注】

- ①日本比較文学会編『越境する言の葉——世界と出会う日本文学』『日本文学翻訳史年表（1904～2000年）』（彩流社、2011年）などによって、翻訳された日本文学のおおよその全体像が確認できる。
- ②伊藤鉄也氏編『海外における源氏物語』（国文学研究資料館、2003年）には、11種類の言語による源氏物語の外国語訳が紹介されている。なお、伊藤氏のご教示によれば、その後の調査によって、32種類の言語が確認されている、とのことである。
- ③翻訳学の分野では、以下のパスネットとルフェーブルの議論が有益。そこでは、原文と翻訳のたんなる比較ではなく、翻訳に影響を及ぼした文化や慣習に焦点があわせられている。なお、翻訳学の動向については、ジェレミー・マンデイ『翻訳学入門』（鳥飼純美子氏監訳、みすず書房、2009年）を参照した。
Susan Bassnett and Andre Lefevere, *Translation, History and Culture*. (Pinter, 1990)
- ④太田勇氏は、「翻訳にみる差別思想」（『地理』（古今書院）35（8）、1990年8月）と題された短い一文のなかで、「外国小説の日本語訳では、会話の部分が日本風の男ことばと女ことばに書きかえられる」行為、すなわち、「英語や中国語では男女がまったく同じことばをしゃべっているのに、日本語に訳すと見事に男用と女用に使い分けられる」行為をとりあげる。そうして、男ことばと女ことばを分離し、発達させていった近代日本語の「男女差別を助長する役割」に対して、もっと神経質であるべきだ、と主張し、「われわれは、何をどのように翻訳したかで、それぞれの人の価値観を知ることになる。」と述べている。太田氏の文章は、性別に起因する差別への抵抗として書かれたもののだが、看過してならないのは、訳者の価値観が翻訳のなかにあらわれているという事実を、はっきりと指摘していることだ。この発言は、外国語から近代日本語への翻訳にかぎらず、古語から現代語、外国語への翻訳にあたって、同様の問題を喚起する。たとえば、ゲイ・ローリー氏「与謝野晶子の『新訳源氏物語』——その誤訳の意義を中心に——」（国際日本文学研究報告集2『日本文学 翻訳の可能性』風間書房、2004年）は、与謝野晶子『新訳源氏物語』をとりあげ、光源氏の行動の訳文に、夫であった鉄幹に対する晶子じしんの心情が反映されているのではないかと推測する。文学が、訳者の実生活とのかかわりのなかで、翻訳されていく可能性を示唆している。
- ⑤多言語的複数性のなかの一回性を読み解き、個々に底流する枠組みの違いを明らかにしていくことは、翻訳の問題にとどまらない。たとえば、文意不通だからといって、底本とは違う枠組みをもつはずの、底本とは別の写本で校訂してしまうこと、また、鎌倉時代の注釈と、それとは時代という枠組みが異なる江戸時代の注釈を併記してしまうことは是非なども問いなおされてくるはずだ。
- ⑥新編日本古典文学全集20『源氏物語①』（小学館、1994年、61頁）
- ⑦谷崎潤一郎『潤一郎訳源氏物語 巻一』（改版・中公文庫、中央公論社、1991年、61頁 初版・1973年 初刊・1964年）
なお、この箇所をめぐる谷崎訳は、錯乱した状況を示す。すなわち、旧訳「（稿者注—光源氏を）女にしても拝みたいやうで、」（谷崎潤一郎『潤一郎訳源氏物語 巻一』中央公論社、1939年、61頁）—（1）説、新訳「（稿者注—自分自身が）女の身になつても（稿者注—光源氏を）拝みたいやうです。」（谷崎潤一郎『潤一郎新訳源氏物語 巻一』中央公論社、1951年、37頁）—（2）説、新々訳「（稿者注—光源氏を）女の身におさせ申して拝みたいやうです。」—（1）説と、頻繁な入れ替わりがみられるのである。西野厚志氏「Lost in Transformation——谷崎潤一郎訳「源氏物語」の〈女にて見ること／女性への生成変化〉——」（『日本近代文学』81、2009年11月）は、三つの谷崎潤一郎訳のうち、旧訳と新訳をとりあげ、（1）説と（2）説が反転していることに考察を加えている。
- ⑧瀬戸内寂聴『源氏物語 巻一』（講談社、1996年、51頁-52頁）
- ⑨吉海直人氏編『源氏物語研究ハンドブック1』（翰林書房、1999年）
これに収められていない論文として、次のものがある。

円地文子『源氏物語私見』「女にて見奉らまほし」（新潮社、1974年 →『円地文子全集 第十六集』新潮社、1978年）

木村正中氏「美意識」（別冊国文学『源氏物語事典』学燈社、1989年）

木村朗子氏「『源氏物語』におけるジェンダーの女性について」（物語研究会編『新物語研究 3 物語〈男と女〉』有精堂、1995年）

吉海直人氏「『女にて見る』追考」（『解釈』45（5）、1999年4月 →『源氏物語の新考察——人間と表現の虚実——』十八付「『源氏物語』以降の『女にて見る』について」おうふう、2003年）

加藤昌嘉氏「『しのびね物語』のコトバの網——王朝物語世界の中の——」（『詞林』25、1999年4月）

加藤昌嘉氏「女にて、などかめでざらむ」（国文学解釈と鑑賞別冊『源氏物語の鑑賞と基礎知識』タタ 霧 至文堂、2002年）

木村朗子氏「権力再生産システムとしての〈性〉の配置——『とりかへばや物語』から『夜の寝覚』へ——」（『物語研究』2、2002年3月 →『恋する物語のホモセクシュアリティ 宮廷社会と権力』第1部1「権力再生産システムとしての〈性〉の配置『とりかへばや物語』をめぐって」（青土社、2008年）

木村朗子氏「帝の性——『夜の寝覚』の制度を読む」（『言語情報科学研究』7、2002年5月 →『恋する物語のホモセクシュアリティ 宮廷社会と権力』第1部2「帝の〈性』『夜の寝覚』の制度を読む」（青土社、2008年）

山崎和子氏「源氏物語『女にて見奉らまほし』再考」（高知言語文化研究所・愛知大学国語学研究会編『日本語の語義と文法』風間書房、2007年）

ロイヤル・タイラー「男性のイメージを覆う女性のパール」（講座源氏物語研究11『海外における源氏物語』おうふう、2008年）

岡内弘子氏「院の御ありさまは、女にて見たてまつらまほしき——『源氏物語』総合——」（『香川大学国文研究』33、2008年9月）

西野厚志氏「Lost in Transformation——谷崎潤一郎訳『源氏物語』の〈女にて見る／女性への生成変化〉——」（注⑦）

⑩岩井良雄『源氏物語語法考』（笠間書院、1976年、281頁）

⑪吉海直人氏「『源氏物語』の男性美——『女にて見る』をめぐって——」（『風俗』71、1982年5月 →『源氏物語研究〈而立篇〉』影月堂文庫、1983年 →『源氏物語の新考察——人間と表現の虚実——』十八「『女にて見る』と皇族美」おうふう、2003年）

引用は、初出論文によったが、『源氏物語の新考察——人間と表現の虚実——』においても、文言の変更はない。

⑫山崎和子氏「源氏物語『女にて見奉らまほし』再考」（注⑨）

⑬『源氏物語大辞典』（角川学芸出版、2011年、1520頁）

⑭さらに、「女にて見る」の研究史は、このコトバが、女のような美しさを重んじる表現であったとしても、たんに女性的な男性美の表現であることにとどめようとせず、男か女かの次元を超えたところでの解釈を目指しつつあるらしい。たとえば、吉海直人氏「『源氏物語』の男性美——『女にて見る』をめぐって——」（注⑪）は、「女にて見る」が、（1）「男である相手を女にして見る」か、（2）「自分が女になって男である相手を見る」のどちらで解釈されるか、といった問題ではなく、「象徴や比喩を超えた究極的な美」として、王権とのかかわりも視野にいれて捉えられる表現であることを指摘する。木村正中氏「美意識」（注⑨）も、「女性的契機による美意識の世界がここに造立していることには違いない。（中略）二つの解釈の相違は美的には存在しないのである。」として、（1）説、（2）説の対立にこだわろうとしていない。

⑮新日本古典文学大系19『源氏物語一』（岩波書店、1993年、38頁）

- ⑯円地文子『源氏物語私見』「女にて見奉らまほし」（注⑨）
- ⑰円地文子『源氏物語一』（新潮文庫、新潮社、2008年、66頁 初刊・1972年）
- ⑱円地文子『源氏物語一』「序」（注⑰、8頁-9頁）
- ⑲与謝野晶子『新訳源氏物語 下巻の二』『新訳源氏物語の後に』（『鉄幹晶子全集8』勉誠出版、2002年、449頁 初刊・金尾文淵堂、1913年）において、「この書の訳述の態度としては、（中略）主として直ちに原著の精神を現代語の楽器に浮き出させようと努めた。細心に、また大胆に努めた。必ずしも原著者の表現法を襲はず、必ずしも逐語訳の法に由らず、原著の精神を我物として訳者の自由訳を敢てしたのである。」という発言も、与謝野晶子訳が、まさに、与謝野の『源氏物語』であることを示している。外国語訳に目を向けてみても同様である。英訳を著したロイヤル・タイラーは、「源氏物語の翻訳——忠実さから冒険へ——」（フェリス女学院大学第二回日本文学国際会議『源氏物語と日本文学研究の現在——身体・ことば・ジェンダー——』フェリス女学院大学、2004年）において、源氏物語を翻訳するさい、「私がいくら「忠実さ」を目指したとはいっても、あくまでも私なりの、個人としての考えに添った忠実さを避けることはできませんでした。」と述べ、その具体例として、濡標巻で紫の上が「我は我」と思うところと、手習巻で浮舟が「むつかしとも、おそろしとも、ものを思ふよ」と嘆くところの、二つの翻訳をとりあげる。また、緑川真知子氏『『源氏物語』英訳についての研究』第三部「序」注（2）（武蔵野書院、2010年、279頁）によれば、タイラー英訳の刊行にあわせて、インターネット上で、タイラーじしんによる次のエッセイが公開されていたようだ。

Royall Tyler, "The Tale of Genji: A New Translation and a New Book"

（ペンギン、プトナム社インターネットサイト <http://www.penguinputnam.com/static/packages/us/taleofgenji/essay.html>）（二〇〇四年十一月現在）原文 "... someone like me now has superb modern editions, punctuated and annotated in accordance with eight hundred years of scholarship, to help make an accurate translation possible after all. There is still plenty of room, though, for choice and interpretation. Every word, every sentence offers a range of possibilities among which I had to thread a path, guided by my own conception of the text. That is why this is a new *Genji*." — 現在、私のような翻訳に携わろうとするものにとって、何しろできる限り正確な翻訳を可能にするような、現代語訳付きのそして八百年に及ぶ源氏研究に基づく句読点や注釈が施されたテキストがある。だが、翻訳語の選択や解釈にはまだ多くの余地が残されている。一語一語、一文一文にまだ、私自身のテキストの理解に導かれながら翻訳の道筋をつけなければならない可能性が多くある。だからこそ、これは新しい『源氏物語』なのである。

タイラー英訳は、タイラーの『源氏物語』である、といってよい。なお、現在、当該のインターネットサイトに、このエッセイは確認できない。

- ⑳ロイヤル・タイラー「男性のイメージを覆う女性のパール」（注⑨）
- ㉑新編日本古典文学全集21『源氏物語②』（小学館、1995年、201頁）
- ㉒ただし、ここで述べられたタイラーの見解は、タイラー英訳には、直接的に反映されていない。タイラー英訳は、「the young gentlemen pining for their sweethearts at home were all consoled.」（故郷にいる彼らの恋人たちを恋慕う若い従者たちは、すっかり、慰められた。）（Suma p.245）と訳していて、ここから、男女の構図そのものを読みとることは難しい。
- ㉓玉上琢弥『源氏物語評釈』（全14巻・角川書店、1964年-1969年）
- ㉔本稿が提起するバイアスという側面からではなく、訳者が意識してほどこしたさまざまな工夫からも、社会や文化の仕組みを解き明かすことができるはずだ。そのひとつとして、平川祐弘氏『アーサー・ウェイリー『源氏物語』の翻訳者』第三章「日本の女たち」（白水社、2008年）がある。

付記 1

源氏物語の外国語訳は、以下に依り、引用にさいしては、巻名・頁数を示した。また、読解の便宜をはかり、私に日本語訳も付しておいた。

▽ウェイリー英訳 Arthur Waley, *The tale of Genji: The Arthur Waley translation of Lady Murasaki's masterpiece with a new foreword by Dennis Washburn*. (Tuttle, 2010)

▽サイデンステッカー英訳 Edward G. Seidensticker, *The Tale of Genji*. (Tuttle, 2007)

▽タイラー英訳 Royall Tyler, *The Tale of Genji*. (Penguin Books, 2003)

▽シフェール仏訳 René Sieffert, *Le Dit Du Genji*. (Diane De Selliers, 2007)

▽豊子愷中訳 豊子愷『源氏物語（上・下）』（世界文学名著文庫、人民文学出版社、1993年）

▽林文月中訳 林文月『源氏物語（一―四）』（訳林出版社、2011年）

付記 2

本稿で詳細に扱うことができなかった、翻訳における「女にて見る」のバリエーションについては、拙稿「源氏物語の「女にて見る」をどう訳すか（承前）—— 翻訳のなかのジェンダーバイアス ——」（『平安文学研究・衣笠編』7、2016年3月）でとりあげた。参照を請う。

* 討論要旨

村尾誠一氏は、「女にて見る」をめぐる翻訳の事例から、具体的にはどのようなバイアスを読み取ることができるのか、と質問した。発表者は現在の研究状況を踏まえ、次のように回答した。当初は国や言語、時代によって「女にて見る」の解釈が分かれるのではないかと予想されたが、実際に調べてみると、一人の翻訳者が訳を重ねるごとに解釈を変更している谷崎潤一郎のような例や、場面に応じて異なる訳を当てている例があった。そうだとすれば、「女にて見る」をどのように翻訳するかという問題は、最終的には翻訳者の個性の問題に還元されてしまうのかも知れない。しかし、それでも何らかの傾向を読み取ることができるのではないかという考えに基づき、調査を続行しているところである。発表者は以上のように回答して、質問については今後の課題としたい旨を述べた。